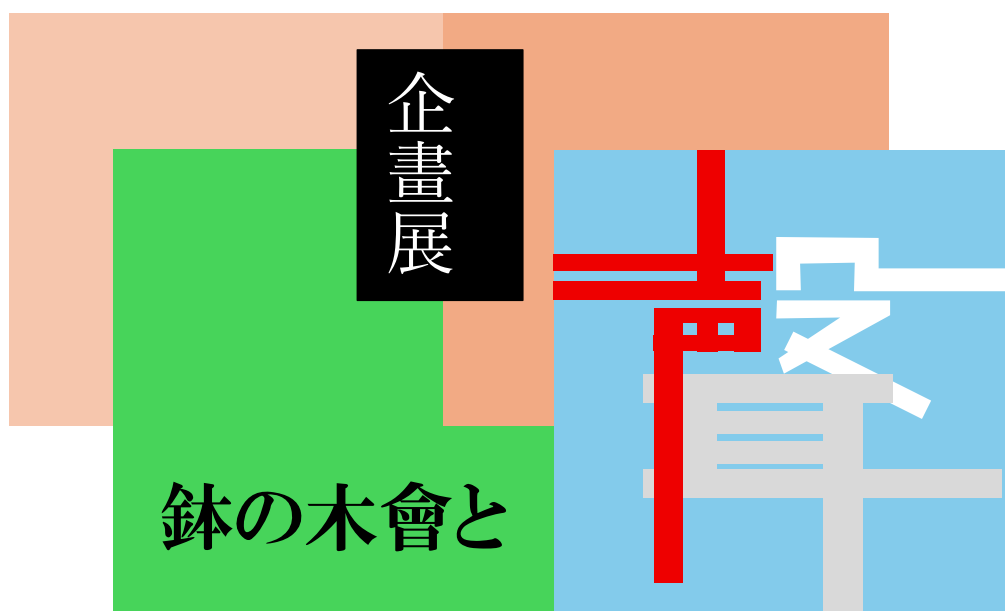


この「鉢の木会」とは、
私はちよつと不思議なかわりがあった。



ある時私は、「鉢の木会」という集まりに招かれた。

2025 年 10 月 4 日(土)～11 月 30 日(日)

本企画展では、ドナルド・キーンと文人の交流の紹介として、「鉢の木会」について取り上げ、鉢の木会が丸善の協力で出版した雑誌『聲』についても扱います。

終戦後間もない 1948 年ごろ、鎌倉在住の親しい文人たちが仕事以外の場で飲食を楽しむ会が発足しました。のちに「鉢の木会」と名付けられるこの会に集ったのは、中村光夫、吉田健一、吉川逸治、福田恆存、神西清、大岡昇平、三島由紀夫の 7 人でした。会では文学の話、つまり、仕事の話はしないことが決まりました。

1955 年、キーンは吉田の誘いで鉢の木会に参加します。会では記録代わりに連歌会が行われていました。これは、のちに吉田の翻訳で『日本の文学』(1963)として出版されるキーンの *Japanese Literature*(1953)の影響でした。

1958 年に鉢の木会は丸善の協力のもと、季刊文学雑誌『聲』を発行しました。『聲』には新人から大家まで多くの作品が掲載されました。福田の依頼でキーンも森鷗外の「花子」(1910)についてのエッセーを掲載しました。キーンはのちに「花子」を「重要作品」としています。

キーンと鉢の木会の関係、そして、『聲』の発行理由とその影響について、直筆資料、初公開資料を交えて紹介いたします。

●みどころ

○『聲』掲載の直筆資料

季刊文学雑誌『聲』(全10号、1958.10-1961.1)掲載作品の直筆原稿を展示します。
ドナルド・キーン「鷗外の「花子」をめぐつて」(第4号、1959.7/丸善雄松堂株式会社所蔵/日本近代文学館寄託)、「花子後日譚」(第6号、1960.1/丸善雄松堂株式会社所蔵/日本近代文学館寄託)のほか、戦後の国語改革(「現代かなづかい」、「当用漢字」の告示(1946))への反対姿勢を示し、歴史的かなづかいの正当性を説いた福田恆存「私の国語教室」の第5回「国語問題の背景」(第5号、1959.10/県立神奈川近代文学館蔵)の直筆原稿を展示します。

○初公開資料

本企画展では、下記の資料4点を初公開いたします。

・『聲』編集企画ノート(1958)

(丸善雄松堂株式会社所蔵/日本近代文学館寄託)

丸善宣伝部の本庄桂輔による1958年4月3日から同年8月30日までの日記形式の記録。『聲』の発行は福田恆存と本庄桂輔の間で計画された。

誌名の決定、創刊の挨拶状の作成をはじめ、丸善が注力した海外文学欄の方針決定に関する記録が残されている。

・“文学雑誌”発行計画(複製)(1958.4.17)

(丸善雄松堂株式会社所蔵/日本近代文学館寄託)

『聲』の発行計画に関する丸善の社内文書。「『聲』編集企画ノート」の記述から本庄桂輔が1958年4月17日に作成したものと考えられる。丸善の出版協力の経緯と理由について記述がある。

・吉田健一宛 本庄桂輔 1961.1.8 書簡 (1961.1.8)

(県立神奈川近代文学館・吉田健一文庫蔵)

『聲』廃刊直後に本庄桂輔から吉田健一に送られた書簡。ともに活動をした3年間を振り返り、一生の思い出にすると述べられている。

・福田恆存贈呈本 『日本の彫刻 上古一鎌倉』(美術出版社、1960.6)(贈呈:1962.2頃)

(ドナルド・キーン・センター柏崎所蔵)

ドナルド・キーンの前10回菊池寛賞受賞(1962.2)を祝して、福田恆存から贈呈された書籍。キーンの前『聲』寄稿は福田の依頼によるもので、当資料からは同時期のキーンと福田の交流がうかがえる。

●開催概要

展覧会名 鉢の木会と『聲』

会 期 2025 年 10 月 4 日(土)～11 月 30 日(日)
展示替えあり 前期：10 月 4 日(土)～11 月 1 日(土)
後期：11 月 2 日(日)～11 月 30 日(日)

会 場 ドナルド・キーン・センター柏崎 2 階 企画展示室

主 催 公益財団法人ブルボン吉田記念財団

観 覧 料 大人 500 円・中高生 200 円・小学生 100 円
(入館料で企画展をご覧ください)

本企画展に際しましてお力添えをいただきました皆様へ厚く御礼申し上げます
(敬称略・順不同)

個人

長田鞆繪 栗原千種 神西敦子 福田逸 吉田暁子

企業・団体

一般財団法人ドナルド・キーン記念財団 県立神奈川近代文学館
公益財団法人日本近代文学館 丸善雄松堂株式会社

株式会社ブルボン